

研究題目	ムーソルグスキイの歌曲におけるロシア語イントネーション模倣の諸相	報告書作成者	竹下可奈子
研究従事者	竹下可奈子		
研究目的	ロシア人作曲家ムーソルグスキイ（1839-81）は自身の手記の中で、ロシア語イントネーションを音楽の中で表現することの重要性をたびたび主張していた。また実際に彼の一時期の声楽作品は、ロシア語イントネーションを非常に巧みな技術で模倣していると評価されてきた。しかし、その「巧みな技術」の詳細や、時代による変化については、先行研究において十分に考察されてきたとは言い難い。そこで本研究では、ロシア語イントネーション模倣を、声楽作品の旋律線においてロシア語のイントネーションを再現しようとした試みと定義し、とくにムーソルグスキイの歌曲の旋律線にがいかにロシア語イントネーションを模倣しているかに焦点をあて、分析を行うこととした。 ムーソルグスキイのロシア語イントネーション模倣を扱ったこれまでの研究には、2点の課題点を指摘できる。まず 1 点目は、ムーソルグスキイのロシア語イントネーション模倣の諸相とその変化について、包括的な研究が行われていない点である。これまでの研究では、ムーソルグスキイのロシア語イントネーション模倣の特徴がもっとも強く表れていると考えられる一部のオペラや歌曲をおもな対象とし、分析が行われてきた。それにより、そういった作品におけるイントネーション模倣の諸相は明らかとなっている。しかし先述したように、その詳しい分析対象となっているのは彼の代表的なオペラと一部の歌曲のみであり、各旋律線の個別的な分析に終わっている。そのため、ムーソルグスキイのロシア語イントネーション模倣がいつ頃始まり、その諸相がどのように変化したのかを詳細に明らかにするためには、彼の声楽作品全体に焦点をあてる必要がある。 そして 2 点目は、研究者の聴覚印象および恣意的な判断に基づいた分析となっており、客観的な考察に欠けている点である。これまでの研究では、とくにピッチにおける分析の根拠となっていたのは研究者の聴覚印象であった。また、必ず歌詞の意味内容との結び付けが行われ、登場人物の意図や感情、個人性を配慮し、旋律線の特徴を解釈することが行われてきた。 そこで本研究では、実際のロシア語イントネーションとの比較という手法を取り入れ、彼のロシア語イントネーション模倣について分析を行う。分析対象は、ムーソルグスキイが彼の作曲人生において断続的に書き続けた歌曲全 66 曲とする。研究者による主観的な判断を排除した手法で分析することによって、客観的な視点からムーソルグスキイのロシア語イントネーション模倣の諸相とその変化について明らかにすることが、本研究の目的である。		

研究内容

分析は2段階に分けて行った。

まず段階1は、ムーソルグスキイの歌曲全 66 曲を対象とした分析である。手順は以下のとおりである。

- ①先行研究にもとづき、歌曲の作風という視点から全歌曲を4つの時期に分類する。
- ②ロシア語の言語学的特徴に依拠し、旋律線がロシア語イントネーションと類似していると判断できる特徴を確定する。
- ③すべての歌曲における単語およびフレーズの数を確認する。
- ④リズムとピッチの両面から、ロシア語イントネーションと類似していると判断できる特徴に該当する単語およびフレーズを抽出し、集計する。
- ⑤4つの時期をベースにしながら、時代に沿ったムーソルグスキイのロシア語イントネーション模倣の諸相とその変化を概観する。

段階1における分析の目的は、すべての歌曲を同一の条件をもとに分析することによって、客観的にロシア語イントネーション模倣の変化をたどることである。

次に段階2は、実際のロシア語母語話者による歌詞の朗読資料を用いた分析である。手順は以下のとおりである。

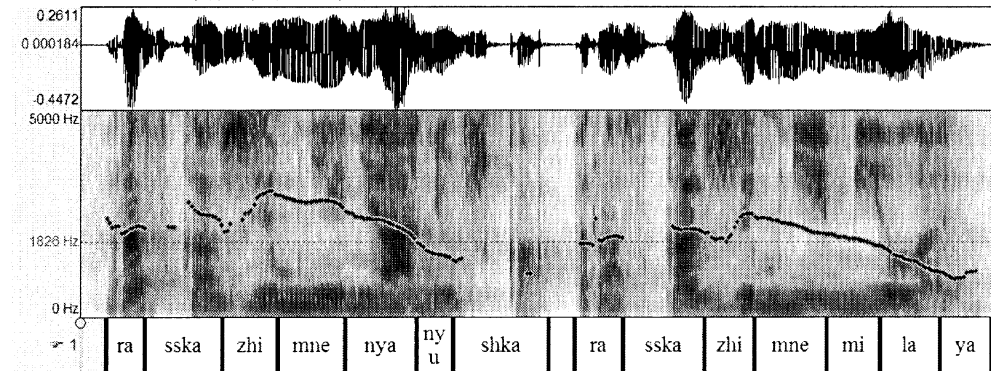
- ①段階1において確定した4つの時期から、それぞれ任意に5曲ずつ代表曲を選定する。
- ②選定した歌曲について、複数のロシア語母語話者による歌詞の朗読発話を入手する。
- ③音声分析ソフト Praat を用いてそれらを解析し、計算モデル prosogram を用いて人間が発話を知覚した際のピッチパターンを算出する(説明書参照)。
- ④フレーズ境界、リズム、ピッチの3点から、歌曲の旋律線と、朗読発話のピッチパターンとを比較し、両者の類似性について分析する。その際、ピッチとリズムにおいては「イントネーションの中心部」に焦点をあてる。「イントネーションの中心部」は話者が強勢を置く単語のストレス音節に位置し、長さによる強調と急激な音高変化が生じる。位置する単語は話者の意図によって決定される。
- ⑤時期ごとに分析結果を比較考察し、時期によるロシア語イントネーション模倣の傾向を明らかにする。

段階2における分析の目的は、実際のロシア語朗読発話を用いた分析を行うことで、段階1では分析不可能な「イントネーションの中心部」におけるロシア語イントネーション模倣について考察を行うことである。「イントネーションの中心部」はリズム、ピッチの両面においてロシア語イントネーションのキーポイントとなる点であるが、それが置かれる単語およびそこでのピッチ変化の有り様は話者の判断に委ねられている。そのため実際の発話からしか「イントネーションの中心部」については観察することができない。その部分に着目した分析を行うために、実際の朗読発話を用いた段階2の分析を行う。

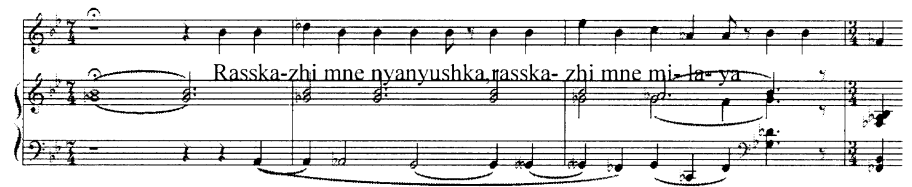
研究のポイント	最大のポイントは実際のロシア語母語話者による朗読発話を分析に用いた点である。これによって研究者の主観を排除した、客観的な考察を可能にした。 また、詳細な分析が一部のオペラと歌曲に限られていた先行研究に比べ、ムースルグスキイの全歌曲すべてを対象としたことで、一貫した視点からムースルグスキイのロシア語イントネーション模倣の諸相とその変化を追うことを可能にした。
研究結果	段階1の分析の結果、シラビックな手法や均一な音価での旋律線の構成といった、ロシア語イントネーションとの類似と判断できる特徴は、第2期の歌曲以降に散見され出すことが明らかとなった。とくに第2期の後半からは、フレーズ内の音高変化をストレス音節前後に限定するというピッチ面での模倣の傾向もみられ、そういった特徴の多くは第3期の歌曲に引き継がれていた。しかし第4期では、シラビックな手法は保持されていたものの、均一な音価やストレス音節前後に限定された音高変化といった手法は放棄される傾向にあった。 段階2の分析の結果、第1期の歌曲ではロシア語イントネーションとの類似性は低く、第2期に向かうにつれ、まずリズムから模倣されていたことが明らかとなった。そして第3期でリズムとピッチの両面による模倣がなされるが、第4期には極端な模倣が放棄されていた。 また、両方の分析から、時代による変化とは別に、ムースルグスキイの作詞か否かでロシア語イントネーション模倣の手法に変化が見られる可能性が示唆された。
今後の課題	今回はロシア語イントネーション模倣の諸相とその変化を見るために、おもに4つの時代分けをベースとした分析を行なった。その結果、時代に沿った変化を追うことはできたが、各曲におけるイントネーション模倣のより詳細な内容について明らかにすることができないという限界性があった。そのため、今後は個々の歌曲に焦点を当てた分析が必要となると考える。今回の分析でとくに特徴的な結果が得られた歌曲の中で、イントネーションの中心部以外の音節のピッチ、リズムがどのように構成されているかを検討することによって、より詳細なイントネーション模倣の手法が明らかになるとともに、旋律線におけるイントネーションの中心部の扱いも、より明瞭になるであろう。とくに、ムースルグスキイ作詞の歌曲において、ピッチ、リズムの両方がどのように作用し合い、旋律線を構成しているのか詳細に調査することで、ムースルグスキイのロシア語イントネーション模倣の諸相および変化をさらに明らかにすることが可能になると考えている。

○ムースルグスキイの歌曲《ばあやと》における冒頭フレーズ “Rasskazhi mne nyanyushka, rasskazhi mne milaya” 部分の朗読音声資料および楽譜

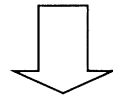
●Praat による朗読音声の音声波形および F0 曲線の表示



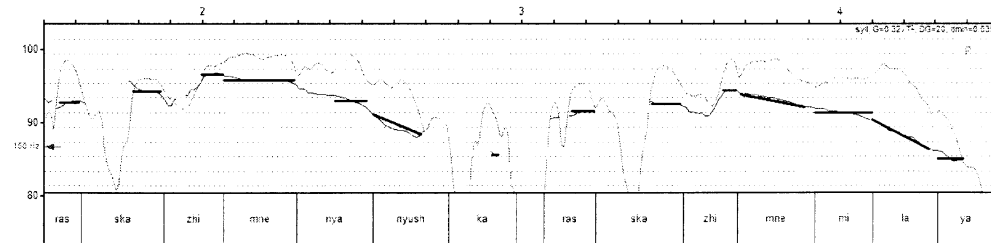
●楽譜



※話者 A によって発話された音声をも、F0 (基本周波数) 曲線として析出している。
縦軸の単位は Hz (ヘルツ) である。



●Prosogram による、人間の知覚ピッチパターンの描写



※上記音声を、人間が知覚する形に変換し、描写している。
縦軸の単位はセミトーンである。

(注: 写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)